

プロジェクトの遠隔運営を考える＜その5＞

新しい日常業務への適応と遠隔ツール

新型コロナウイルスの感染拡大以降、技術協力は、新しいルールのもとで実施方法の再考が求められることになった。最近になって、ようやく海外渡航の条件が緩和されてきたが、以前とまったく同じというわけにはいかず、現地業務と組み合わせ、オンライン業務を活用していくスタイルが組み入れられている。さまざまな移動や行動の制約下では、これまで以上に柔軟な考え方をもって、実施効果を最大限にあげていくことが求められている。感染症の蔓延した世界にいか「適応」していくかというテーマは、そもそも途上国という不利な条件下でたえず試行錯誤してきたわれわれにとっては、前向きな姿勢で取り組むべき、不可欠な態度であるようにも思われる。今回は、コロナ禍で様変わりした技術協力の日常業務において、特に活用している遠隔ツールについて、その特性や使用感についてまとめてみたい。

1. SNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）のチャット機能

eメールの延長上でさかんに活用しているのが、Skype、Messenger、LINE、WhatsAppなどのメッセンジャーアプリである。従来のテキストで文章を送るという点においてはeメールと同じという意見もあるが、SNSはなんといってもスピード感が異なる。もちろんeメールも併用するが、カウンターパート（CP）や現地スタッフ（NS）との通信では、SNS付属のチャット機能やメッセンジャーアプリで代用する機会が圧倒的に多くなった。eメールは相手がいつ読んだのかわからず、返信までタイムラグがあるが、SNSチャットは一度つながれば会話のような相互のやりとりが可能であり、話がある場ですぐに進む。またグループでの情報や意見の共有も手軽であり、チャットから必要に応じてオンライン通話に移行するのも便利な点である。とくに英語で書くのが苦手なCP・NSに連絡する場合、eメールをおこして文章化するより、生の通話を適宜まじえて、手軽に業務依頼・指示がおこなえる利点がある。た

だ、メッセンジャーアプリは長文のやりとりには適さないことから、グループ内での複数関係者間の情報共有がやや雑になる傾向があると感じる場面がある。また、いまのところメールと比べると、記録・保存性が弱い気がする。しかし、このような弱点は工夫により克服の余地があるかもしれない。

2. オンライン会議ツール

社員がそれぞれ異なる国で業務にあたるが多かった国際耕種では、新型コロナ感染拡大以前から、Skypeを活用して、社員会議をおこなってきた。昨年以降、社内外での遠隔会議の回数が増えてからは、ZOOMやTeamsなどもあわせて使うようになった。音質・通信容量の負荷など微妙な特性の違いについては正直なところ感覚的にはわからない。ただ、いずれも便利な画面共有や録音機能があり、実際の会議よりも情報共有や情報の記録といった面では便利なことすらある。会議記録だけでなく、時間がたっても添付資料が消えずに整理して保存されるなどの点は、重宝することが多いと感じている。

3. ビデオ教材の作成

国内業務においても、大学やJICA研修業務の講義もオンラインでの実施機会が増えた。オンラインでスライドを映し、リアルタイムで講義する方式に加えて、事前にスライドに直接音声を入力する方式やビデオ通話で録画・編集する方式もあり、それぞれの作業性や成果品のできばえなど、試行を進めている。こういった仕事は新しい日常で身につけた新たなスキルであるが、海外の技術協力の場面においても、いろいろと応用していけそうであり、前向きに取り組んでいる。一方で、実際の講義では見逃されていたちょっとした言い間違いやスライドの誤植などが、ビデオ教材にはそのまま記録されてしまうことから、これまで以上に音声での発信、ないし成果品に対するこまやかな神経と配慮が必要とされると感じている。